

モーツァルトに会いたい 4

【ピアノ連弾で聞くオペラと交響曲】

2008年11月24日午後3時 / 京都芸術センター講堂

◇ Wolfgang Amadeus Mozart (Salzburg, 1756年1月27日~Wien, 1791年12月5日)

■ オペラ「フィガロの結婚」序曲 KV 492 (1786年)・クラインミヒェル編曲

Primo 岡部佐恵子

Secondo 河野美砂子

■ オペラ「魔笛」KV 620 (1791年)・ツェムリンスキー編曲 より

Primo 小石みなみ

Secondo 河野美砂子

・序曲

・第1幕 イントロダクション「助けてくれ！」

※印は、Primo と Secondo を交代します。

・パパゲーノのアリア「オイラは鳥刺し」※

・第2幕 「神官たちの行進」

・モノスタトスのアリア「誰でも恋の喜びを」

・夜の女王のアリア「地獄の復讐」

・ザラストロのアリア「この聖なる殿堂では」

・童子の三重唱「ふたたびようこそ」

・パミーナのアリア「ああ、私にはわかる」※

・パパゲーノのアリア「娘っ子が可愛い女房か」

・「私達は火の中を歩む」

・パパゲーノ「響け、鈴よ」、パパゲーノとパパゲーナ「パ・パ・パ」

・フィナーレ

————— 休 憩 —————

■ 交響曲第41番 ハ長調「ジュピター」KV 551 (1788年)・ウルリッヒ編曲

Primo 岡部佐恵子

Secondo 河野美砂子

第1楽章 Allegro vivace (C)

第2楽章 Andante cantabile (3/4)

第3楽章 Menuetto — Allegretto (3/4)

第4楽章 Finale — Allegro molto (2/2)

シリーズ第4回目となる今回は、モーツァルトのオペラの楽しさと、オーケストラ作品の素晴らしさを、ピアノによる連弾でお届けしたいと思います。

まだラジオや再生装置が発明されていなかった19世紀のヨーロッパでは、家庭で音楽を楽しむために、ピアノの連弾によってオペラやオーケストラの作品がさかんに演奏されていました。そのため、多くの作品がピアノ連弾用に編曲され、その楽譜が今でもたくさん残っています。今回は、その楽譜を基本に、ところどころ私の編曲も加えながらの演奏になります。

演奏会の予告チラシには掲載していませんでしたが、今日の音楽会は、まず、オペラ「フィガロの結婚」序曲を演奏して始めます。

モーツァルト自身は、芝居やオペラが大好きで、自分のことを「オペラの作曲家」と自負していました。11歳の時に初めてオペラを作曲。35年という短い生涯において、未完や失われたものを含めると20曲以上のオペラを書いています。その中で、いわゆる三大オペラと言われるのが、「フィガロの結婚」、「ドン・ジョヴァンニ」、「魔笛」です。

「フィガロの結婚」は、ボーマルシェ原作、ダ・ポンテ台本によるオペラ・ブッフア（イタリア語による喜劇）で、モーツァルト30歳の時の作品です。物語は、ロッシーニ作曲で有名な「セヴィリアの理髪師」の続編にあたり、伯爵夫人に仕えるフィガロとスザンナの、結婚直前の騒動が中心です。

オペラというものは、ただ舞台の華麗さに目を奪われたり、ストーリーや音楽を追ったりするのみではなく、オペラ劇場という空間全体の独特な雰囲気を楽しむ、といったところがあります。その中で、この「フィガロの結婚」序曲は、まだ舞台上では幕が上っていないのですが、ようやく今からオペラが始まる、というワクワクする気持ちがオーケストラピットからあふれてくる音楽です。

今回は、この序曲を、演奏会「モーツァルトに会いたい4」開幕の音楽として聞いて頂きたいと考えました。

次のオペラ「魔笛」は、モーツァルトの死の年に完成されたもので、正確にいうと、ジングシュピール（ドイツ語による歌芝居）に分類され、レチタティーヴォがほとんどありません（セリフの部分に音楽が付かないということです）。

劇団を主宰するシカネーダーが台本を書いたこのオペラは、親しみやすいメロディや印象深いアリアが数多く聞かれ、内容的にも、3人の童子が登場したり、鈴の音に動物達が踊りだす、といった童話風の部分がたくさん見られます。一方で、その頃モーツァルトやシカネーダーが熱心に活動していた、フリーメーソンという宗教結社の儀式などの影響も見られると言われています。

以下、本日演奏する部分を中心に、簡単に内容を記します。

「序曲」 舞台はまだ幕が上っていません。舞台の下のオーケストラピットから音楽が始まります。最初に鳴る三つの和音は、劇中にも何度か鳴る、大切な和音です。

第1幕 イントロダクション「助けてくれ！」 序曲が終わると、すぐに幕が開き、舞台は、そこそこに木が繁っている岩山。王子タミーノ（テノール）が、「助けてくれ！」と、いきなり歌いだします。大きな蛇に追いかけられているのです。タミーノは、気を失い倒れますが、そこへ3人の侍女（夜の女王の手下）がやって来て、大蛇を退治します。倒

れているタミーノを見て、それぞれが「素敵なお守りするわ」と歌い、3人が争います。

パパゲーノ (バリトン) のアリア「オイラは鳥刺し」 3人の侍女が去った後、パパゲーノが登場。大きな鳥籠を背負い、パンの笛を持っています。パパゲーノは、このお話の、いわば狂言回し役。いつも冗談を飛ばし、ある時は情けなく、またある時は若い娘さんが大好きな鳥刺しです。鳥刺しというのは、鳥を取ってそれを売るのが商売。「ソラシドレ〜」とパンの笛を吹きながら、意識を取り戻したタミーノに、「オイラは鳥刺し」と、自己紹介の歌を歌います。

その後、タミーノは夜の女王に出会い、その娘であるパミーナの美しい絵姿を見てたちまち魅せられてしまいます。夜の女王は、「わが娘パミーナは、ザラストロという悪人に捕らえられている。もし助けてくれるのなら娘をお前にやろう。」と言い、タミーノに魔法の笛、パパゲーノに銀の鈴を渡します。3人の童子が道案内をするなか、タミーノとパパゲーノは、パミーナ救出に向かいます。

さて、ザラストロの屋敷にいるパミーナは、タミーノが助けに来ることを知り、彼に思いを寄せるようになります。一方タミーノは、ザラストロの神殿に入ろうとし、その神官との問答から、悪人だと思っていたザラストロが、実は高潔で徳の高い人物であったことを悟ります。その後、タミーノとパミーナは初めて会いお互いに惹かれますが、ザラストロは、二人が結ばれるためには行方すべきことがある、と言い、タミーノはパミーナと別れ、パパゲーノを連れて試練の道につくこととなります。

第2幕「神官たちの行進」 幕が上ると、舞台は、ザラストロの神殿。神官達が儀式を行っています。ザラストロは、タミーノがパミーナと結ばれる前に試練を受けなければならないことを、神官たちに告げます。この曲は、オーケストラだけの演奏で、歌は入りません。

モノスタトス (テノール) のアリア「誰でも恋の喜びを」 モノスタトスというのは、ザラストロの神殿にいる真つ黒い顔のムーア人で、奴隷の見張り役です。神殿に捕らわれているパミーナに思いを寄せて、キスをしたい、抱きつきたい、と、その落ち着かない恋心を歌います。

夜の女王 (ソプラノ) のアリア「地獄の復讐」 太陽の大祭司ザラストロを敵とし、それを滅ぼそうとする夜の女王の決意のアリア。わが子パミーナに向かって、お前がザラストロを殺さないなら親子の縁を切る、と、短剣を手渡しつつ激しく歌います。コロラトゥーラソプラノの超絶技巧を堪能するアリアです。

ザラストロ (バス) のアリア「この聖なる殿堂では」 ザラストロの人格に触れて、彼を尊敬するようになったパミーナは、深く悩んでいます。母である夜の女王が、「ザラストロを殺せ」と言っているからです。ザラストロは、「この聖なる殿堂に住む人は、復讐心を持たず、敵を許す。愛が皆を導いてくれるのだ。」と、深い声で諭します。

童子の三重唱「ふたたびようこそ」 第1幕で、試練の道の案内をした童子たちが再び登場。もう少しの辛抱ですよ、と、タミーノとパパゲーノを励まします。

パミーナ (ソプラノ) のアリア「ああ、私にはわかる」 パミーナが、タミーノの吹く笛を聞いてやって来ました。会えた嬉しさにパミーナが話しかけるのですが、タミーノは返事をしません。タミーノの試練とは、沈黙を守ることなのです。そのことを知らないパミーナは、「タミーノの愛はもはや失われたのです、死んで安らぎを求めるほかないのでしょう」と、切々と歌います。オペラ「魔笛」の中でも、白眉のアリアです。

パパゲーノのアリア「娘っ子が可愛い女房か」 タミーノとはぐれてしまったパパゲーノは、いったい自分がどこに居るのか途方に促されています。弁者から、何か望みはないかと聞かれ、一杯のワインを所望すると、ワインが与えられました。いい気持ちになってきたパパゲーノは、「願わくは、ここで欲しいのは、娘っ子が可愛い女房か……」と、魔法の鈴(グロッケンシュピール)を鳴らしながら歌いだします。

「私達は火の中を歩む」 絶望したパミーナは、短剣で自らを刺そうとしますが、タミーノは本当はパミーナを愛して

いる、と3人の童子に教えられ希望を持ちます。やがて、沈黙の試練を成就したタミーノは、パミーナに再会。二人は、最後の試練として、魔法の笛をかかげながら、炎と水の道を歩み通し、みごとに長い試練を乗り越えます。笛（フルート）の音を中心としたオーケストラの響きのなかで、タミーノとパミーナが手を取りあって歌います。

パパゲーノ「響け、鈴よ」、パパゲーノとパパゲーナ「パ・パ・パ」 一方、パパゲーノは、パパゲーナという魅力的な娘に一旦出会ったのですが、すぐに見失ってしまい彼女を見つけることができません。絶望したパパゲーノは首をくくろうとしますが、3人の童子に、魔法の鈴を鳴らすことを教えられます。鈴を鳴らすと、「パ・パ・パ……」と歌いながら、あの可愛いパパゲーナが登場！ 二人は、「パ・パ・パ」を繰り返しつつその喜びを二重唱で歌います。

フィナーレ その後、夜の女王と手下の3人の侍女達、それから女王に寝返ったモノスタスが夜の神殿に忍び込もうとします。が、にわかに雷鳴、稲妻、嵐などが起こり、結局、夜の世界の者たちはすべて奈落に沈むことになります。

舞台の最後は、太陽世界の勝利の場面で、ザラストロ、タミーノ、パミーナなど全員が合唱、その喜びを歌い、幕となります。

プログラム後半は、交響曲第41番「ジュピター」を演奏します。

ローマ神話の主神である「ジュピター」という渾名は、モーツァルト自身が付けたものではありません。後世、この曲があまりに壮麗かつ均衡美に比類のないことなどから、人々がそう呼ぶようになりました。モーツァルトが最後に書いた交響曲になります。

晩年、モーツァルトの私生活は借金にあえぐ毎日でしたが、作曲活動の面ではたいへん充実しており、名曲が信じられないほど短期間に次々と生まれました。去年の夏の「モーツァルトに会いたい2・ピアノトリオ」で演奏した「ホ長調 KV542」（1788年6月22日作曲）、同「ハ長調 KV548」（7月14日）、ヴァイオリンソナタ KV547へ長調（7月10日）、交響曲第39番（6月26日）、40番（7月25日）、「ジュピター」（8月10日）……といった調子です。

「ジュピター」交響曲に関しては、今まで多くの方がさまざまなことを指摘していて、それをここで書くのはほとんど不可能ですが、それほどに愛聴されている曲だということでしょう。

一つだけ押さえておきたいのは、「ジュピター音型」についてです。終楽章冒頭に出てくる「ド・レ・ファ・ミ」という音型は、「ジュピター音型」と言われ、モーツァルトが8歳の時に作曲した交響曲第1番にすでに登場し、その後もミサ曲やヴァイオリンソナタなど、モーツァルトの生涯にわたってさまざまな曲に登場する音型です。晩年、モーツァルトは先人であるバッハの作品を多く知るようになります。ポリフォニック（多声的）な音楽をさかんに書くようになります。「ジュピター」の最終楽章、すなわちモーツァルトの全交響曲の一番最後の楽章が、その「ジュピター音型」によるフーガだということ、ある意味で感慨深いものがあります。

難しいことはさておき、今回、私自身が「ジュピター」を演奏してみて一番感じるのは、演奏する喜び、ということです。この曲を今回のプログラムに選んだ最初の理由は、実は、第2楽章の或る部分がどうしても弾いてみたい、という単純なものだったのですが、全曲を弾いてみて、こんなに輝かしく、また高揚する気持ちを心と身体で感じる曲というのは、私はほとんど初めて知ったように思います。

こういう曲を残してくれたモーツァルトに対して、ありがとう！と、手を握りたい気持ちです。